
この少年、従者

ららら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この少年、従者

【Nコード】

N1513F

【作者名】

らじら

【あらすじ】

ある日突然異世界に飛ばされた少年”六峰大騎”が、貴族の少女”アイナ”の従者となってしまふ物語。グダグダで、なんともいえない世界観をお送りします。

第一話：異世界ですか、そうですか

「ちょ、ちょっと！何よこいつ！！」

甲高い声が耳に入ってくる。

頭は依然ぼーっとしている。

目を開ける。

ぼやけた顔が、目の前にあった。

「う・・・ん」

どうやら自分は、仰向けで寝ているようだ。

上半身を起こして目をこする。

暗く、じめつとした地下室の様な部屋にいるようだ。

ぼやけていた目がぱっちり開いて、目の前の人物を鮮明に映す。

薄青い、長い髪をなびかせた少女が目の前にいる。

綺麗な顔立ちの謎の少女を前に、一瞬大騎は目を取られる。

「なんなのあんた」

「それはこっちのセリフなんですけど・・・。君は誰？ここはどこ？」

少女は大騎を無視して勝手に話を進める。

「とじろでどこ出身よ」

「どこって・・・、そりゃ日本だけど」

「ニホン？聞いたことないとかね」

大騎は笑いそうになった。
日本を聞いたことがない？

何を言っているんだ、この少女は。
ここが日本じゃなければ、なんだっていうんだよ。

「やっぱ駄目ね。また失敗だわ」

少女はため息をつくのと、大騎の後ろ首の襟を引っ掴み引きずる。

「わ！ちよ、なんだよいきなり！」

「何って、あんたは廃棄処分よ」

「廃棄処分？何言ってるんだ？」

大騎の質問を無視して、少女は大騎を引きずり続ける。
少女は突然止まり、大騎から手を離す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

少女は手を胸の前あたりで組み、何かを呟き始める。
突然目の前に強烈な光が発せられ、目が眩む。
同時に炎が燃えさかるような音。

「それじゃばいばい」

大騎は目が眩んで、何が起きているのか全く理解出来ない。
すると、足下から謎の熱気を感じる。

第二話：メイド現る

「あ……う……」

布団の中で大騎は目を覚ました。随分と立派なベッドのようで、大きさは裕にダブルベッド並はある。しかし、枕が一つしかないところを見るとどうやらシングルベッドである。

「っ……」

右頬が痛む。ああ、変な女の子に殴られたんだっけ。と大騎は思い出すと、ベッドから体をおろした。

部屋を見渡す。ベッドと同じようにこれまた、見ただけで立派だと分かるようなインテリアに囲まれている。床には高級そうな赤いカーペット、棚にはアンティークっぽい食器、天井にはシャンデリアときたもんだ。

「どこの金持ちの家だよ……」

大騎は窓にかかっていたカーテンを開ける。と、外には広大な草原がずーっと広がっている。遠くにはかすかに海が見える。

綺麗な風景だが、大騎は一抹の不安を感じた。一体ここはどこなのか、ということである。

記憶を探る。確か、近くのゲーム屋に行ってたんだっけ。それでその帰り道に……。ここで大騎の記憶は途切れている。

誰かに会ったような気がするんだけど、誰だっけ。

「あら、目が覚めましたのね」

ドアから突然、メイドの格好をした何者かが現れた。

「どうもすいません。アイナ様にご迷惑をおかけしまして」

メイドの格好をした誰かは深々とお辞儀をする。大騎もつられて頭を下げる。

しかし大騎には大きな疑問がついてまわった。

「えっと、どなたか存じませんが、ここってどこですか？」

「ああ、いきなり召喚されたので分かりませんよね。ここはアルトワイヤ王国のユリウス公爵の別荘にあたる場所ですわ」

「……」

疑問を解決するために質問したつもりだったが、余計に疑問が増えた。

「あー……、召喚？それって何？」

「アルトワイヤ学園での成績上位者のみが認められている、従者召喚のことですよ。ご存じですよね？」

「いえ、全然」

「あら、それはおかしいわね」

メイド格好の女の子は大騎をじろじろと見ると、気付いたように言

う。

「あなた紋章は？」

「紋章？」

「従者の証の紋章ですよ。バッチですけど」

「バッチ？いや、だから知りませんって」

メイド格好の女の子は真剣そうな目つきで一言。

「これって、結構大変な事態じゃないかしら・・・」

大騎は大きなクエスチョンマークを頭の上に浮かべている。
メイド少女は改めて大騎を観察するように見る。

「な、なんですか？」

「ふーん・・・、なにやら服装も変わってますね。どこの出身な
んですか？」

「日本ですけど」

「ニホン、ですか？聞いたことないところですね」

「髪の毛の青い女の子にも言われたけど、日本を知らないってほんとう
ですか？」

「アイナ様もご存じでないのですか。どこにあるんですか？」

なるほど、俺を殴った少女がアイナ様というやつか。と会話から推測する。

「東にある島国ですよ。本当に知らないんですか？」

「・・・はい。というよりは、東の方に島国なんてありませんよ？」

「え？」

第三話：アイナと、ある推測

メイド格好の少女は本棚から一冊の本を持ってくる。題名は、『世界地図』。

表紙を一枚めくり、その見開きを出して大騎に渡す。

大騎は受け取りその見開きを見る。どうやら世界地図のようだが、おかしい。大陸の位置も大きさも、自分の知っているのとまるで違う。

「えっと、これは・・・、世界地図、ですよね？」

「はい」

メイドは淡々と返事をする。

大騎はもう一度世界地図らしきものに目をやる。その中に、メイド少女の言っていたアルトワイヤ王国という文字を見つける。

「ここが、アルトワイヤ王国、ってどこなんだよね」

アルトワイヤ王国の国境を辿る。かなり広い領土であることが分かる。大体ロシアくらいか。

「はいそうです。ちなみに今私たちがいるのはこの辺りです」

とメイド少女が指さしたのは、アルトワイヤ王国の西端に近い場所である。明らかに辺境、周りには草原と山、海くらいだ。なるほど、窓から見えた海はこれなのか。と大騎は思う。

「なんだ、起きたの」

突然ドアから誰かの声があった。少し高圧的なこの声色、どっかで聞いたことのあるものだった。・・・まさか。

大騎はドアの方へ顔を向ける。とそこにはやはり、あの薄青い髪の少女がいた。

「なんだか騒がしいと思ったらやっぱり起きてたのね。シノアに感謝しなさいよ。彼女が止めなかったら、あんた死んでたんだから」

「シノア？」

「あなたの目の前にいるメイドのことよ」

シノアと呼ばれたメイド少女は改めてお辞儀をする。

「シノアです、よろしくお願いしますわ」

シノアが手を差し出す。

「六峰大騎です。どうも」

大騎は照れながら右手を伸ばして、握手をする。薄青い髪の少女も近づいてきて、大騎の前に立つ。

「アイナ、アイナ・ロツテルハイヤー・ル・ユリウスよ」

「よろしく」

と大騎が手を差し出すが、アイナはそれを無視して踵を返す。

「何だよ、握手しないのか？」

アイナはふるふると体を震わせながら、こちらへ顔だけをゆっくりと向かせる。

「なんで主人が、従者なんかと握手しないといけないわけ・・・？」

「従者？なんだよそれ」

「なにつて、あんた従者でしょ！だから召喚したのよ！」

「わけわかんねえって！ちゃんと一から説明してくれよ！」

叫びあう二人の仲介に入るように、シノアが割って二人の間に入る。

「はいはい、ちょっとお静かに二人とも」

シノアがそう言うと、アイナは怒りに震えていた体を落ち着かせ腕を組んで大騎をじっと見る。

「ダイキさんって、少しおかしいってお気づきですか？」

「そりゃね。主人に敬語は使わないし、わけの分からないこと言っし、ニホンなんてありもしない地名を言っし」

「それもそうですけど、ほら、従者の紋章がないんですよ」

アイナはそう言われて初めて気付いたらしく、大騎の体を食い入る

ように見る。

「確かに。じゃあ何？私は従者じゃなくて、その辺の一般人を召喚したっていの？」

アイナはシノアに噛みつくように言う。

シノアは大騎を見ると、困ったようにアイナに言う。

「ただの、一般人っていうわけでもなさそうですよ」

「どういう意味？」

「もしかしたら、ですけど」

シノアは言葉を区切り、大騎の方に振り返る。

大騎はさっきからの二人の会話についていけず、黙り込んでいた。

「確か、ニホンから来たと仰っていましたよね？」

「え？あ、はい」

「ここに来る前の記憶はありますか？」

「えーと・・・、遊びに行っていてその帰り道だったっていうのは記憶にあるんですけど、いまいち・・・」

「あなたの知ってる世界地図には、アルトワイヤ王国っていうのはないんですか？」

「というか、全体的に違ってます。世界地図全体が」

シノアは次はアイナの方へ振り返る。アイナは、シノアの質問の意図がいまいち掴めず困惑していた。

大騎も全く質問意図が分からず、というよりも結局ここがどこなのかという疑問も重なり、完全に頭がショートしていた。

シノアは一步下がって二人の顔を見ながら、ある推測を言う。

「もしかしたら、ダイキさんは、別の世界から来たのかもしれないん」

アイナはなんとも言えない苦そうな顔をし、大騎は完全に頭の中がパンクした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1513f/>

この少年、従者

2011年1月15日14時26分発行